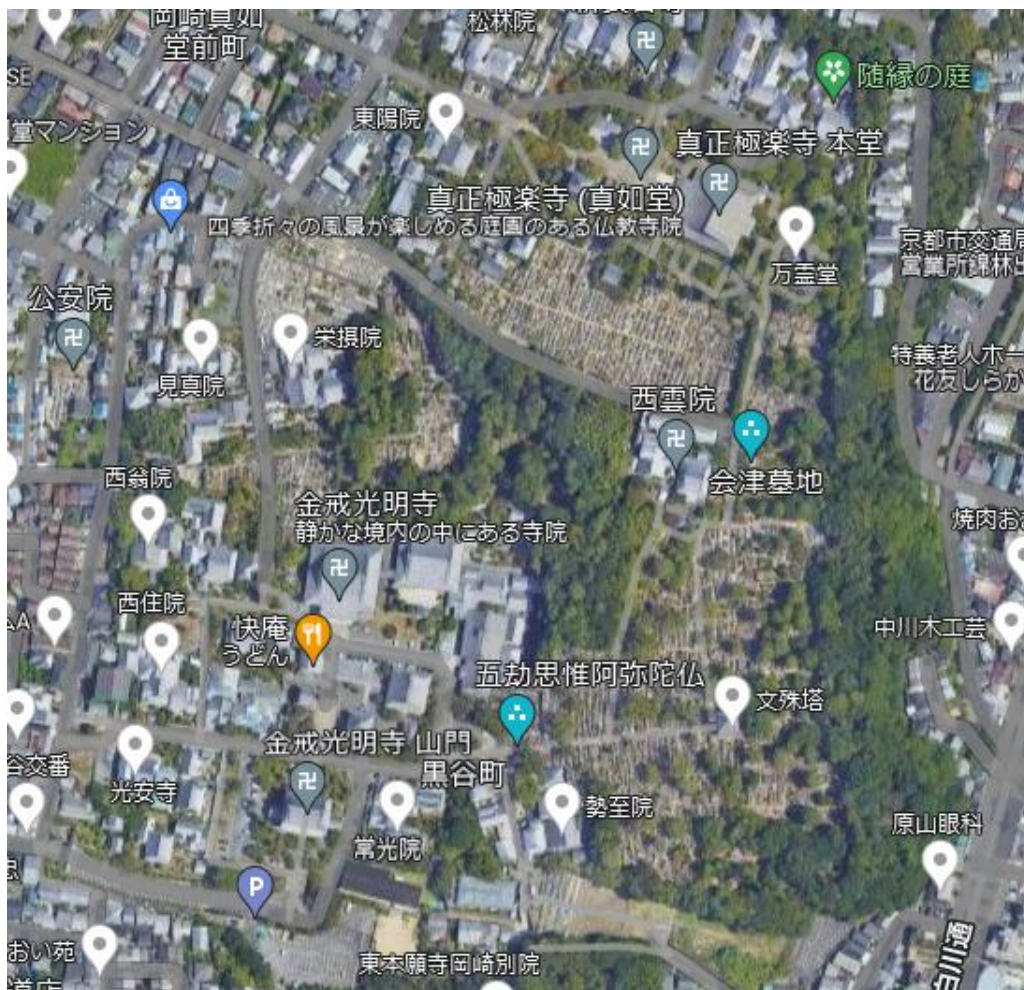


# 写真アルバムから

## シリーズC 寺社華風月（白黒）

### CI. 真如堂・光明寺 1973-1974

森隆一



真如堂・光明寺 (Google Map)

## CI. 真如堂・光明寺 1973-1975

1973年の暮か1974年初めに白黒の現像器具一式を買い求めた。ここから、白黒写真の模索が始まった。手始めに、境内に自由に入ることが出来るお寺のうち、人の少ないところに行ってみることにした。当然ながら、拝観料が必要なところは考えていない。

当時住んでいた銀閣寺前町の近くで、境内が解放されていて、参拝する人の少なく境内の広い寺院は、真如堂と光明寺で、両寺は境内を接している。

### 真如堂 1973

まずは、真如堂の総門とその内側から見た本堂・三重塔である。



門前の道を手前に(西に)戻ると、宗忠神社の鳥居に突き当たる。この鳥居の前でクロスしている道は、吉田山南西部と銀閣寺を結ぶ道で、学生時代よく通った。この門前の風景は懐かしいので取り挙げた。

## 光明寺 1973

次は、真如堂の池と思ってきたが、今回 Google Map 画像で確認していたら、光明寺に属するものとわかった。



次の写真は光明寺の山門と御影堂(本堂)である。山門の手前で子供が野球をしていたので撮ってみた。田舎や郊外の寺で子供が遊ぶのは珍しいこ

とではないが、このような大きな寺では珍しく感じた。当時は、光明寺では紅葉で知られている長岡京市の光明寺のほうを思い浮かべる人が多かったと記憶している。



次の鐘楼の写真は、光明寺で撮ったと思っていた。Google Map 画像では、山門の奥の階段を上った左手に鐘楼がみられる。一方、真如堂にも同じような鐘楼が見つかった。本堂の南にある墓地の北側中央に位置している。この南に、上の池があり、東に会津墓地が見られる。Google Map の写真からは、真如堂の可能性が高い気がするが、どちらとも判断できていない。



‘石の上にも3年’という格言がある。本当かどうかはわからないが、‘流水に浸されている石でも3年経てば苔が生えてくる’ことが転じて、‘3年辛抱すれば何とかなる’と理解している。逆に、‘3年経っても進展が無ければ、止めた方が良い’ともいえるであろう。

次の写真は、文殊塔より石段道を撮ったものである。この景色は気に入っているので、鐘楼の写真とともに、少し考えて撮ったが、今一つ・二つ・三つである。この他に、塔も撮ったが、さらに一つ・二つである。撮影・現像・引き延ばし、どれも初めてであり、‘ボチボチやっていく’しかないなと思った。



この写真を簡単に評価すれば、ピントがずれて、‘多くのものが移りこんでいる’ となる。

## あとがき

タイトルには1973-1974と付けたが、始めが1973年か1974年か記憶していない。この期間は、白黒写真を現像まで込めて出来るかどうか、あるいは、続けられるかどうかを模索している期間であった。

結果的には、10年程は続いた。何故続いたかを考えてみたことがある。筆者の癖として、道具を集めることと、(生死にかかわらない範囲で)うろつく(興味に任せて歩きまわる)ことがあり、石仏写真はこれに合っていることではないかと考えたことがある。

道具に関する格言としては

弘法筆を扱はず

下手の道具調べ

がある。‘弘法も普段はいいものを使っている’と思った。また、‘迷ったら高い方を選べ’と言ってくれた人がいる。そこそこの道具を使っていれば、道具調べをする必用はなくなる。

下手に関しては。

下手な鉄砲も数打ちゃ当たる

がある。思いついたことを実現する技術と機材が無ければ、ただやみくもに撮るしかない。



写真を撮始めた 1973 年に使用していたのは、Pentax SP と標準の 55mm F1.8 レンズで、北海道旅行の延長でカラー・スライドを撮っていた。大きなお寺では建物の全体写真を撮るのが難しく、動物園の猿山では、小さい猿しか撮れなかった。カメラ雑誌で、レンズを揃えるときは、倍々を基本とすることが良いという記事を見て、28mm F3.5 と 135mm F2.5 の 2 本のレンズを購入した。このとき、SPF のボディも購入したと思っている。100mm F4 マクロレンズもこの頃買ったと思われるが定かではない。

本章の広角で撮った写真は 28mm レンズのものである。

この時に、引き延ばし機 Asahi Durst M30I と Nikon の引き延ばしレンズなど現像器具一式を購入したと考えられる。

そんなに間を置かずに、明るいレンズが欲しくなったことなどから、35mm F2. 85mm F1.8 を購入した。結果的にはこの 2 つを常用することになった。カメラ 1 台の時は、35mm を付け、必要に応じて 85mm を用いる。2 代の時は夫々に装着し、余裕があれば、他のレンズも携行するようになった。35mm のレンズの利点は、焦点距離がフィルムの横幅と一致することから、被写体までの距離が丁度写る横の長さとなることである。

この選択に勿体を付けようと次のことを考えた。

何かあるかなという気持ちで眺めるときの視野が 35mm の画角に近く、何かを確かめるときの視野が 85mm の画角に近いのではないかと考えた。



この後、200mm F4 と 300mm F4 を購入した。

2-3年の間に、9点ほどを購入したことになる。1点5万とすれば45万になる。

1970年に就職後、暫くして、給与が増えたことを記憶している。これを調べたら、教員の給与改善を目指し、人材確保法が1974(S49)年に公布され、1974(S49)年から1979(S54)年まで給与改善が行われた。この後、ボーナスの使用は半分までと決めたことを覚えている。

Pentax SPは1964年に発売され、50mmF1.4付きで定価51,000円ということである。SPFは1973年にSPの後継機として発売されたようである。筆者が購入したときの定価は35,000前後ではと記憶している。

1971年発売のキャノン一番レフカメラのボディ価格は、

F1: 78,000、FTb: 35,000であった。

現在、キャノンデジタル一番レフカメラEOS()のボディ価格は、

IDXMarkIII: 880,000、5DMarkIV: 324,500、90D: 168,300で、

参考として、KissX10i: 115,500、KissX90: 59,950

である。最上位機種と普及品との価格差が広がっている。

オーディオのカートリッジに関して、次の話を読んだ。検査の基準を1桁上げると、価格は2倍になる。手作業で造られるものと違って、工場で

大量につくられるものは、製造工程で出来をチェックすることは不合理である。単品で売られるものは、それなりの価格で売られるので、全品検査が適当であろう。色々な検査が行われていると思われるが、1つの検査だけが行われているとする。検査は機械で測定し、その数値が規定値から一定の範囲におさまれば合格とする。これを10%とすれば、1桁上げるとは、これを1%とすることであろう。この話を読んだとき、普通品は1%は外れていることになり、割り切れない気がした。また、友人が電車で、某電機会社の工場に勤めている人が、‘家電は業務用と違って検査が緩いから楽だ’と言っているのを聞いたと言っていた。

この頃から、家電製品などの民生用工業製品の品質が向上してきたような気がする。

一番レフカメラの高級機にはアルミダイキャストが用いられている。

Wikipedia「ダイキャスト」では

ダイキャストとは、金型鑄造法のひとつで、金型に溶融した金属を圧入することにより、高い寸法精度の鑄物を短時間に大量生産する鑄造方式のことである。ダイキャストとも言われる。またこの鑄造法だけでなくダイキャストによる製品をもいう。ダイキャストをとらえて鑄物の産業革命と称す向きもある。

日本におけるダイキャストの研究は1910年頃から大学の金属研究室を中心に行われ1917年には最初のダイキャスト会社が大崎に設立された。当時は鉛・錫・亜鉛を中心

とした低融点合金を使用していたが、昭和に入りアルミニウム・銅合金の素材も使用可能となり、生産の拡大が進展し、太平洋戦争中は軍需品を中心に年間 2,500 トン程度の生産まで達した。戦後 1950 年頃までは低迷期が続いた。1952 年以降、日本工業規格（JIS）に関連規格が制定される。その後、高度経済成長や自動車産業の発展とそれに伴う、ダイカストマシンの改良・合金素材の開発が急速に進展し、1990 年代はバブル崩壊の影響で微増に留まるものの、マシンのコンピューターコントロール化・大型化もあいまって、2000 年代には生産性の向上と製品の多様化が顕著となり、生産量は年間 100 万トンを超えた。

この他に元は軍需研究として行なわれたものとして、理化学研究所仁科研究室とサイクロトロン、殺人光線の研究から派生したと聞いた、電子レンジなどが挙げられる。

今日では、日常生活でも不可欠となっているインターネットは、軍隊の通信機能を強化することを目的として開発されたものが、基礎となっている、と聞く。